

宮古史を初めて体系化した 慶世村恒任著書・論考・年譜

仲宗根 將二

慶世村恒任
きよむらうじん



慶世村恒任は首里系英俊氏の後裔である。家譜はいまのところ確認されていないが、慶世村が宮古史を初めて体系化した著書『宮古史伝』（一九二七年刊）は、首里系英氏の支流と記している。かなり詳細にわたって紹介しており、『史伝』執筆当時「家譜」が存在していたであろうことをうかがわせている。

英氏は英祖王の末裔と伝えられる渡慶次里之子重張が秋嶺王姫真嘉戸樽金按司を娶ったのに始まるという。三世重孝は向氏羽地王子朝秀とともに総奉行職にあつたが、康熙三甲辰（一六六四）年十月十三日、「慶賀王舅（国使）」となつて大嶺親雲上とともに中国に渡つた。梅花の沖で嵐にあつて遭難したさい、清国皇帝への献上品である金壺が盗まれた。その罪科によつて康熙六年五月二十一日処刑された。その子重祐は父の罪科に連座、同月二十三日宮古に流罪となつた。謫居十年、重祐は罪を許されて中山に帰えり、父の後を次いだ。英氏の名乗頭は初め「重」であつたが、王命によつて重祐の子から「恒」に改められた。重祐は宮古謫居中、野崎邑の山戸筑のムスメ真牛を娶つて、男子二人をもうけていた。兄を加那渡名喜、弟を渡名喜と名付けた。弟渡名喜は長じて英俊氏を称し、恒充と名乗つて洲鎌与人までなつた。英俊氏はこの恒充に始まるという。

稲村賢敷はその著『宮古島庶民史』（一九五七年刊）のなかで、家譜の写しとして、「長子（康熙十二年生）は百姓となつて野崎村に住

み、其の子孫は野崎村及七原部落に多い、次男（同十五年生）は父に従つて上国し名を恒充と改めて官職に就き宮古英俊氏の始祖となる」と記している。さらに久松の口碑として、重祐の妻となつたムスメは「うし」といい、家号は「上仁屋（ういにや）」で、古代に中国から渡来したという七人兄弟の由緒ある家柄だとも記している。

宮古三間切（平良・下地・砂川）の歴代頭一〇人のうち英俊氏からは五人でている。恒道、恒盛、恒長、恒嘉、恒慶の五人で、いづれも屋号（住所）は、「前ヒヤ」である。なかで広く知られているのは乾隆二十七〜三十三（一七六二〜六八）年まで平良の頭（平良大首里大屋子）をつとめた恒道（童名三良）である。

恒道は乾隆十（一七四五）年五月三日、伊良部首里大屋子のころ貢物宰領となつて、洲鎌目差らとともに上国、同年十二月十九日那覇から帰途についたが、暴風にあつて同月二十五日台湾のどこにもしれぬ海岸近くに漂着した。飲料水が乏しくなつていたため小舟をおろして水汲みに行くと、大勢の人が刀を振りかざして襲つてきたので、そのまま船へ逃げ帰つた。

越えて一月五日近くに帆柱は折れ、舵ももぎとられて航行の自由を失つた中国船が近づいてきた。もはや沈没寸前であり、「我等も死活は未だ定まらないが、見殺しするに忍びない」と、総員二十四人を救助した。残り少ない食料、飲料を分ち合つて中国へ向つたが、またも逆風にあつて一月十五日台湾府の金包里近くで難破、乗員は残らず泳いで上陸、救助されて福建の琉球館へ送られた。清国皇帝

は恒道らの義挙を知って賞賛し幸領二人、船子四十二人にそれぞれ藍布四端、綿花四包、茶一包、麦粉一包、老酒二甕、豚二匹、羊二匹をおくった。二年間滞在ののち進貢船で帰国した。清国皇帝、台湾府等の書によって恒道らの行為を知らされた王尚敬は、恒道に勢頭座敷、目差に筑登之座敷を与えて賞した。こうして恒道らは乾隆十三(一七四八)年三月ようやく宮古に帰ることができた。

恒道はそののち多良間首里大屋子、狩俣首里大屋子をへて乾隆二十七年(一七六二)年八月、平良大首里大屋子へと昇進している。

英俊氏からのその後の頭職輩出はこの恒道の義挙のもたらしたものだとして『宮古史伝』は記している。一九七五(昭和五十)年六月十日、平良市熱帯植物園内に、平良ロータリークラブ(砂川玄隆会長)によつて、「平良恒道顕彰碑」が建立された。なお一八七九(明治十二)年、廃藩置県後の戸籍整備にさいして、英俊氏系統の多くは池村、伊志嶺、垣花姓などを名乗っており、慶世村姓はきわめて少ない。

一八九一(明治二十四)年

4・21 砂川間切下里村大原一二六(現宮古島市平良下里七六三、

上角自治会)で、父恒綱(明治四年五月十三日生・十二年八月三日相続)、母マツ(下里村、白川氏後裔・奥平恵任長女、慶応三年十月六日生)の長男として生まれる。童名「茶武」と名付けられる。祖父は恒規、祖母メガは西里村・幸地良教四女、嘉永元年九月十三日生。

一八九七(明治三十)年

8・9 父恒綱死去する。二十六歳二か月。

8・30 六歳で家督を相続する。前年六月弟恒良は一歳八か月で死

去しており、相続時の家族は母マツ三十歳、妹カマド生後九か月、祖母メガ四十八歳の女性ばかり三人である。同年成立する「東大原隣所契約書」に慶世村恒任名で加入する(加入58名)。

一八九八(明治三十一)年

4・1 平良尋常小学校(現宮古島市立北小学校)に入学する。

一九〇二(明治三十五)年

3・ 同校卒業。

4・1 宮古島高等小学校(一九〇四年平良高等小学校と改称)に入学する。同期に池村恒章、下里加味、平良進らがいる。

この年十二月末日をもって宮古・八重山の土地整理は終了して、一六三七年以来の人頭税廃止。翌年一月一日他県同様の国税徴収法並びに地租条例適用される。同時に徴兵令も免除規定を解除し、全面適用となる。

一九〇四(明治三十七)年

10・ 母家一棟普請する(茅葺き?)。

一九〇六(明治三十九)年

3・ 平良高等小学校卒業。

4・ 沖縄県師範学校本科一部に入学する。寄宿舎に入り、消灯時間後は押入れにローソクを持ち込むなど、舎監に隠れて『不如帰』(蘆花)、『金色夜叉』(紅葉)等の文学書に読みふける。

一九〇九（明治四十二）年

時期未詳 四年生のころ流行性脳膜炎を患い、一命は取り止めたが

翌年退学、帰省したと伝わる。

一九一一（明治四十四）年

月日未詳 台所一棟普請する（茅葺き?）。

〃 徴兵検査を受けて合格、熊本の歩兵第十三連隊（一説に都城二十三連隊）に入営する。

一九一二（明治四十五・大正元）年

9. 歩兵第二十四連隊射撃演習で成績優秀に付き入賞する（連隊長陸軍歩兵大佐 横地長幹）。（二十四連隊は福岡市に本部をおいており、入営先について熊本・都城両説あるも、あるいは福岡であったかもしれない）。

一九一三（大正二）年

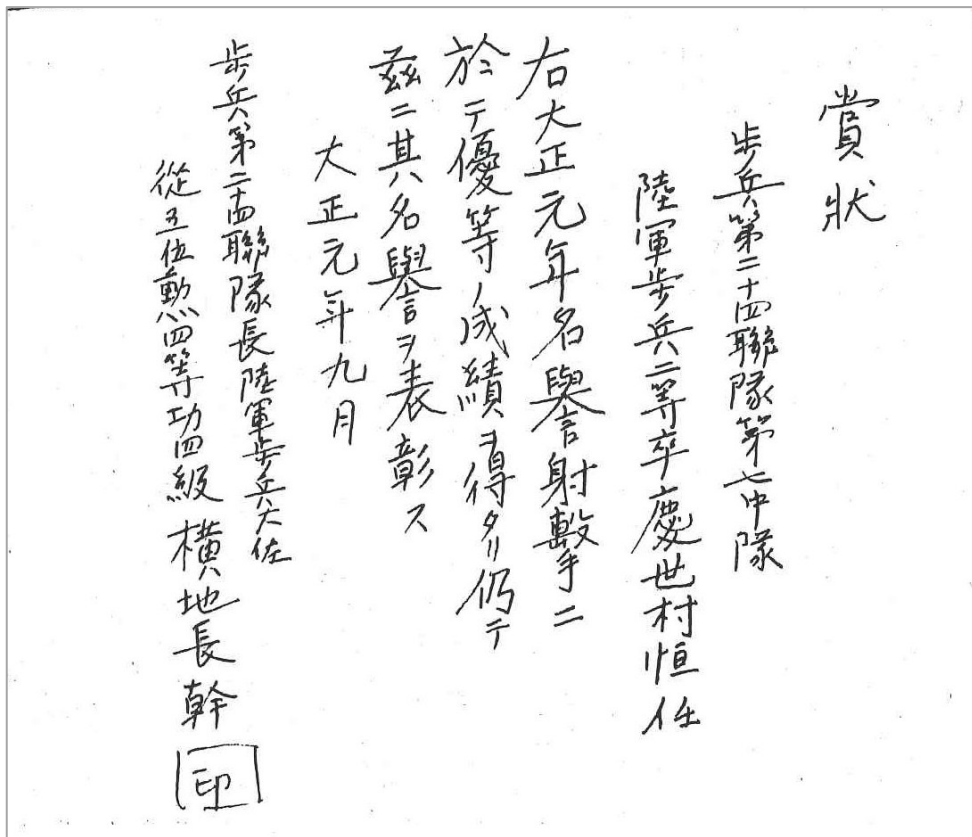
月日未詳 除隊、帰郷する。

一九一四（大正三）年

8・13 長男恒一生まれる（のち恒夫と改名、生母カメは西里村在下地恵添・カマドの長女、明治二十三年二月五日生で、大正六年十一月二十三日付で入籍、同八年十一月二十八日午後二時死去）。

このころ自宅でガリ版刷り『宮古朝日新聞』を創刊。取材から執筆、ガリ切りまで一人で処理したと伝わる（稲村賢敷著『宮古島庶民史』一九五七年は大正四年創刊と記す）。

〈資料1〉賞状（写） 大正元年（平恒次教授提供）



平良・城辺・下地三村組合の、いわゆる三村道路の開通を記念して、「三村民の歌」を作詞・作曲して流行させる。「宮国家のカマド小」など多くの俗謡を作詞して、沖縄民謡のメロディーにのせて流行させたとも伝わる。

10・8～22 清村泉水名で『琉球新報』に「宮古女性史」を発表する(六回)。

一九一五(大正四)年

11・10 大正天皇即位にともなう「御大典」祝賀行事に向けて、「大正四年秋半ば…」で始まる歌・曲をつくって流行させ、また青年男女をあつめて演劇活動を始めたと伝わる。

一九一六(大正五)年

時期未詳 熊本連隊へ予備役入隊する(伍長勤務上等兵)。除隊後も帰郷せずおよそ二年間、平戸、五島の各離島はじめ北九州各地をめぐる童話や講談を語り歩く。大正八年ごろ「母危篤」の電報で帰郷する(師範時代の病気やこの間の様ざまなもの入りで、家産の大半を傾けたと伝わる)。

一九一九(大正八)年

4・ 『先島新聞』(月三回発行) 5・15・25日、本社・八重山石垣村、社主・松下晚翠、東京出身) 宮古支局につとめ、同紙附録宮古号の編集にたずさわる。「清村泉水」あるいは「泉水」の筆名で多くの通信を書く。四か月後退社する(紙面では五・五付に入社、八・一五付に退社の社告)。

5・5～6・5 与那国の鬼虎の娘を題材にした一八七行の長編

9・13 叙事詩「先島秘史哀歌・敗将の娘」を四回連載する。
午前十二時、妹カマド本籍地で死去(22歳9月)

11・28 妻カメ死去(29歳9月)

一九二〇(大正九)年

5・10 宮古初の衆議院議員選挙で兼島方茂・下地徹・本村昌剛・田崎昌位・垣花実令らとともに立津春方(憲政会)を支持して、盛島明長(政友会)らと激しく対立する。『宮古新報』に拠って論陣をはり、あるいは蔵元跡(現共和ホテル附近)やマイヌモー(現宮古神社)等の演説会場で演壇に立って立津の推薦演説をしたと伝わる。

恒任は司会もつとめていたのであるうか、「ミヤークンウテイ、カンテイアツザイウラマウ、シユンポウシンシイガドウ、シナマカラ、エンゼツサーイバ、シーナシキスキイフイサマチヨ…」(宮古で神の如く仰がれておられる春方先生が今から演説するので、皆で聞いて下さいよ…)と方言で紹介した、という(奥平恵可先生回顧談)。

月日未詳 この年、母家を葺き替える(茅葺き?)。

一九二一(大正十)年

9・10 七原尋常小学校(22・4・21松林尋常小学校と合併、鏡原尋常小学校と改称)代用教員となる。一、二年生を担任、教え子に中山勇吉・新城盛雄らがいる。

稲村賢敷著『宮古島庶民史』(一九五七年)は「大正十(九?)年には慶世村、瀬名波(進)、富永(岩雄)各氏が一緒になって宮古時報紙の発刊を見るようになり、この時始めて活字

印刷の新聞が宮古に出来たように思う」と記す。

一九二二(大正十一)年

- 1・25 七原尋常小学校准訓導となる。在職中「世界にはこれほど多くの面白い話があるのにわが宮古には何もないのか」との児童の質問に発奮して、同僚に諮ってガリ版刷り『島物語』(未確認)を発刊する。

- 11・15 伊良部尋常高等小学校へ転勤する。

一九二三(大正十二)年

- 11・13 新里尋常高等小学校(現上野小)へ転勤する。六年生を担任、教え子に下地明文(砂川明芳長兄)らがいる。

一九二四(大正十三)年

- 1・25 同校を依願退職する。退職後は三度び新聞編集に従事したと伝わるも詳細は未詳。

一九二五(大正十四)年

- 7・20 「宮古神社」鎮座祭を記念して南島史蹟保存会(平良町字下里七六三・著者住所)から『宮古五偉人伝』の小誌を発行する(初の中山朝貢Ⅱ与那覇勢頭豊見親、宮古中興の祖Ⅱ仲宗根豊見親、宮古上布創製Ⅱ稲石刀自、甘藷導入Ⅱ長真氏旨屋、造林Ⅱ白川氏恵根ら五人を収録)、三二頁、定価六〇銭。巻末に田中春榮著『宮古アヤゴ選釈』と共に『宮古史伝』の近刊予告をする。

〈資料2〉近刊予告 見よ！此の驚くべき大姉妹篇の出現を！

近刊予告 見よ！此の驚くべき大姉妹篇の出現を！

宮古アヤゴ選釈

近刊

田中春榮氏著

古き文明は新らしき文明の母胎である。そこには豫言があり、希望があり、探求がある。吾等は注意深く古き文明を探求することに依つてのみ、来るべき時代に生きるの途が得られる。而して此の宮古アヤゴこそは、實に世界に誇るに足るべき、吾が古き文明の所産である。まことに吾々は此の尊きアヤゴを、研究し愛唱することに依つてのみ、先人達の心を知り、その時代の文明を知ることと出来る。而かも今や世を擧げて琉球文明の探求に没頭せんごの時宜に適したものと云はねばならぬ。著者は數年前より、宮古アヤゴの研究に志せる人、その集めたるものを見るに、短歌四十餘章、長歌七十餘章、數に於いて誠に驚くに足るべく、而かもその釋文の妙に至りては、民謡の古調を新しい時代の精神に活かして、よく宮古アヤゴの本質を捉へてゐる。万人必讀の巧著である。

宮古史傳

近刊

慶世村恒任氏著

史籍なきは文盲の蠻民である。苟くも一等國の伍班に列したる我が帝國の一角を領しながら、何等郷土的に見るべき史籍なきは、實に宮古郡民の一大恥辱であらねばならぬ。著者慶世村氏常に之を慨し、數年來其の研究に没頭し、殆んど收拾に堪へざる程に散じ果て古り盡した書冊文書を驅り集め、遺跡を遍歴し、口碑傳說遺物を糺し、漸く纏め得たのが本書である。島始開闢の神代より天木の代、按司の代、殿の代の争亂世態を叙し、豊見親の代大親の代(又は在番時代)の文物、制度、事蹟を精述し、而して廢藩置縣後明治大正時代に及び、行政、制度、教育、産業、風俗其他諸般の世相を最も正確に記し、現代に於ける黨争變遷の經緯、政治思想發達經程等は就中見るに足る。行文流麗而も著者獨特の靈筆を揮ひしもの、家門に採りては祖光累代記さるべく、個人に採りては郷土の古今を物語る好同伴たるべく、南島研究家に採りては參考の資となるべきものである。四六判美本にて近く出版される。敢て一本を薦む。

發行所 南島史蹟保存會

一九二六（大正十五・昭和元）年

夏・大阪外国語学校ロシア語教師ニコライ・A・ネフスキーの

二度めの宮古調査に同行、協力する（8・7 幸地良章〔久松小校長・立津春方義弟、のち三島姓〕と「ニーマ墓」庭で、根間の旧家に「美人の生れぬわけ」を語る。8・17「月のアカリヤザガマの話」について語る。月日未詳「宮古島子供遊戯資料」について語る。

11・7 一男恒次生まれる（実母平良メガガマ〔西里一六九平良寛明・マツ二女、明治二九・一〇・三生〕も未だ入籍せぬうち父恒任死去のため、平良〔のち平〕姓のままとなる）。

一九二七（昭和二）年

2・20 病軀をおして宮古史を初めて体系化した『宮古史伝 全』を仲地活版印刷所（平良町西里三二一）、南島史蹟保存会（平良町字西里三〇七、砂川真修並びに発売所大野書店住所）から発行する（砂川真修・砂川真章兄弟・下地敏之らが協力。さらに同書「改訂修補版」『宮古現代誌』『宮古党争史論』の執筆、刊行を予告するも著者死去により総て未刊となる）、定価二円。

12・20 『曲譜附宮古民謡集』第一輯を南島史蹟保存会から発行す

る（以後一九二八年二月・四月・六月の三回順次二〜四輯の発行を予告するも未刊となる）、定価各五〇銭。

時期未詳 現上角里一帯に呼びかけて屋敷の一隅を提供、共同井戸

を掘る（俗称・西ウプバリガ）。往時のことについて、近所のかみの少女少女たちは、つねに机を前に書見し、あるいは執筆にふける。学者風。恒任をリチャム主。と

よんで畏敬の念でみていたと語る。

一九二八（昭和三）年

2・1（1・25?）『沖繩宮古新聞』を創刊する（毎月五・十五・二十・二十五・三十日発刊の月六回刊）。このころ県立宮古中学校の創立記念運動会の持ち方をめぐって宮古郡教育会の、「彦馬会」と称する平良恵路・下地恒規・松川恵伝らの若き教師グループと県視学池村恒章とが地元紙上で論争したと伝わる。若き教師グループは慶世村の『宮古新報』、県視学は瀬名波進の『宮古民友新聞』に拠ると伝わる（伊志嶺賢二『回顧二十年 宮古教育界夜話』一九六一年）が、あるいは慶世村のそれは『沖繩宮古新聞』ではなかったらうか。訂連載（18回）する。

9・5〜12・20 『沖繩宮古新聞』に「仲宗根豊見親組躍書」校

一九二九（昭和四）年

1・19 午後八時、本籍地で死去、三七歳一〇か月、法名「文誉良章信士」

一九三五（昭和十）年

6・25 『宮古史伝』台湾・台北で須藤利一らによってガリ版刷り再版される（巻頭にワラ算、大立大殿ミヤールカ、洲鎌の「古墳」、人頭税」石など写真六枚、宮古地図収録）。

一九四〇（昭和十五）年

8・28 須藤利一（台北）らの『南島』第一輯末に「南島叢書」第

二編として『宮古史伝』近刊予告される。

一九四七（昭和二十二）年

12・27 宮古支庁改称して宮古民政府は「郷土文化功労者」として

歴史家Ⅱ伊波普猷・富盛寛卓・慶世村恒任ら三氏の合同追悼会を催す。西原雅一・下地敏之らが慶世村の生前のエピソードなどを紹介する（当日のもようは一九四八・四・一宮古文化連盟発行『文化』四月号に掲載）。

一九五三（昭和二十八）年

9・15 平良彦一編著『楽譜附 宮古民謡選集 全』で、宮古民謡

「東里真中」の解説中、慶世村恒任は「トノグシク」は「己の城」と主張して八重山渡来説を否定した、と記す。

一九五五（昭和三十）年

11・1 『宮古史伝』那覇で伊志嶺賢二によって活版刷り刊行される（巻頭に遺影と漲水御嶽の写真各一頁追加掲載、歴史家比嘉春潮乞われて推奨文「序」をよせる）。

一九六一（昭和三十六）年

7・10 伊志嶺賢二は『回顧二十年 宮古教育界夜話』で、一九二〇年の「初の代議士選挙」並びに一九二八年の県立二中分校（翌年独立宮古中学）創立をめぐって、「彦馬会の啓蒙運動」中、慶世村恒任についてふれる。

〈資料3〉『宮古史伝』「序」（一九五五年）

序

宮古史伝は既に二十年來、私の編輯に備へられて研究士とするその恩恵を蒙り、たびたび学友に示して愛蔵を誇った書の一つである。この書の初版は昭和二年（一九二七）であるが、数年を経て私は與史の古書、歴で初めてこれを発見した。全く偶然で大きな喜びであった。

宮古旧史の名をもつて知らるゝ宮古島紀事仕女や宮古島由来記、御嶽由来記等は平くから字界に知られているが、宮古は古くから文雅の士が多く、古文獻も多いと云つたらしい。それに獨特のあやこの中には他に見られない史時というべきものがあり、歴世村氏は臥にこれらに現し、これらを担し研究していたらしい。郷土史の編纂を思い立ちてからは、神話伝説と古文獻を研究し、遺物を調べ旧跡を踏査し、また家々の家譜や記録類に至るまであまねく渉獵して史料を捜し出さぬことを努めたようである。慶世村氏が史料の採集において如何に慎重であつたかは、家々の家譜に對し、必ずしも記録を稱存することなく常に批判的態度で臨んだといふこともこれを知ることが出来る。このやうな真摯な多年の研鑽の結果がこの宮古史伝であつた。

宮古史伝を讀む私は神國一千年史を聯想する。博覽強紀の真境名氏があらゆる文獻を渉獵し編纂して、一千年に亘る資料を胸中に收め、これに序列を以て遠慮なき筆に載せたのがあの神國一千年史であらう。研究者はこれを二冊の歴史辭典として利用することが出来る。宮古史伝についても同様のことを買へる。この書は著者の企圖したように「郷土宮古の文化、民俗、治制、人物その他の因つて来る過程」を知らしめるに十分であるとともに、私私にとつては價値すべき宮古歴史辭典でもある。たゞ書中古代文字の存在につき、また奈良朝若しくは平安朝初葉の頃、日本本土より渡來した二団が土着民を征服し、又はそれ等との雜婚によつて特權階級をつくつたのではないかの推論だけは述（にむ）かに留書しがないものがあり、寧ろこれは中山世説における為朝源海傳説と一脈相通するものではないからうか。また、神話伝説に對しては社會發展の理法の上から今一步つき込んだ解釋が望まれるのではなからうか。

私は著者の人と為りに對しては序文によつてその経歴の一端を知り、また、別に宮古民謡集の著あるによつてその趣味の一面を推し得たに過ぎないが、しかし「怪物が宮古の天地を横行している」といふやうな激しい言葉で初版の序言をはじめている著者は、書中、近來の戦争に於れては遺傳の諸説を駁らし、「宮古歴史論」の著述を豫告するなど、深く世を驚かす情熱を揮つて、この宮古史伝を書いたのではなかつたかと考へるものである。

このたび本書が再刊されることになつたが、この書はたしか昭和十七年の春、須藤利一氏等の南島發行所によつて宮古の吉田書店から僅少部数ながら出版が出て、同好の士に頒けられたと覚えてゐる。すると正確にいへば今回は第三版といふべきであらう。とまれ、本書が伊志嶺賢二氏の特志によつて再び世に出て、広く読まれるやうになることは喜ぶべきことである。需められるまゝに所感を怠りなく述べたが、当らざるところあらは裏意をよみ次第である。

一九五五年九月十五日

東京・荻原にて

比嘉春潮

- 一九六二(昭和三十七)年
- 10・21 『週刊宮古』六六号は新聞週間座談会「宮古島の新聞史と先覚者」現役記者が語るその盛衰」で下地徹ら、草創期の宮古新聞界について慶世村恒任を取りあげる。
- 一九六四(昭和三十九)年
- 3・25 中山勇吉は『鏡原小学校創立四十周年記念誌』で、「思い出の恩師達」を執筆、二年生の時の担任慶世村恒任についてふれる。
- 一九七六(昭和五十一)年
- 10・21 『宮古史伝』(復刻版)吉村玄得によって刊行される(寄稿 慶世村恒夫・仲松恵爽)。
- 12・28 島尻勝太郎は『琉球新報』に「『宮古史伝』の復刻について」を執筆する。
- 一九七七(昭和五十二)年
- 3・31 仲宗根将二は『沖縄県史』別巻に「『宮古史伝』を執筆する」。
- 7・19 吉村玄得(筆名・松下仁)は『宮古毎日新聞』に「『宮古史伝』との出会い」を執筆する。
- 一九七八(昭和五十三)年
- 7・15 仲宗根将二は『宮古研究』創刊号に「慶世村恒任の宮古研究について」(試論)を発表する。
- 一九七九(昭和五十四)年
- 6・15 慶世村恒任没五〇年を記念して慶世村恒任を顕彰する会(砂川惠敷会長)設立される。
- 11・30 宮国定徳は『平良市史』第一巻通史編1(先史・近代)に「慶世村恒任と『宮古史伝』」を執筆する。
- 一九八〇(昭和五十五)年
- 2・20 慶世村恒任を顕彰する会は平良市の同意を得て平良市熱帯植物園入口附近松林に道路に面して「宮古研究の父 慶世村恒任之碑」建立、除幕式を挙行する(碑文日付は一九七九・一二・二〇、揮毫・池間昌彦、刻字・仲本正雄、施工・司組)。
- 一九八一(昭和五十六)年
- 3・31 仲宗根将二は『宮古研究』3号に「慶世村恒任と草創期の宮古新聞界について」を発表する。
- 一九八三(昭和五十八)年
- 5・30 仲宗根将二は沖縄タイムス社刊『沖縄大百科事典』上巻に「慶世村恒任」、同下巻に「『宮古史伝』」を執筆する。
- 10・24 平良好児は『日刊宮古』に「新聞記者としての慶世村恒任に就いて」先島新聞附録宮古号の発刊」を発表する。
- 11・10〜12 平良好児は『琉球新報』に「叙事詩『敗将の娘』」慶世村恒任の長編詩」を発表(連載三回)する。
- 一九八四(昭和五十九)年
- 3・ 砂川明芳は『鏡原小六〇周年』収録「鏡原小学校の生い立ち」で同校の前身七原小在職時代の慶世村恒任について紹

- 介する(同記念誌は新城盛雄「茶山のお化けーマウガン(守神)で命拾い」と題した慶世村恒任のエピソードも収録)。
- 3・31 砂川明芳は『平良市史編集だより』一四号に「慶世村恒任の周縁」を発表する。
- 9・14 砂川明芳は『宮古島郷土史考』第三部で「第二節 慶世村恒任と教え子」を執筆する。
- 10・28 仲宗根将二は郷土史講座第10講で郷土の人物像「慶世村恒任と稲村賢敷」を発表する。
- 11・9 仲宗根将二は県立図書館宮古分館主催第一六回郷土史講座で「慶世村恒任と宮古研究」を担当する。
- 4・ 慶世村恒任を顕彰する会(砂川恵敷会長)は事務局を担当した宮古郷土史研究会に残金四四万一四八八円を活動費として寄託する。
- 1990(平成二)年
- 3・22 仲宗根将二は宮古郷土史研究会三月定例会で「宮古研究の父慶世村恒任生誕百年」を発表する。
- 9・20 平良新亮は宮古郷土史研究会九月定例会で「『宮古史伝』

〈資料4〉慶世村恒任顕彰趣意書(一九七九年)

慶世村恒任顕彰趣意書

郷土史の原典ともいわれる「宮古史伝」の著者、慶世村恒任先生は、明治二十四年砂川開切下里村大原(父恒綱、母マツの長男として生まれました。同三十九年には県立師範学校に進学しましたが、病氣中退され、以後、郷里の教育界、操縦界にその才幹をふるい、学問の深きと文学的才能において他に比肩する者なく、郷土史の研究と著述活動に精励した業績をのこされたことは、衆目ののびとしく知るところであります。

教職のかたわら、あるいは新聞編集の寸暇に「島物語」「宮古五傑伝」「宮古巨匠集」などを刊行されたが、なかみずく「宮古史伝」は、はじめに系統的体系的にまとめられた宮古郷土史の原典として宮古の文化、民俗、治制、人情、その他神話、伝説、古謡なども収録、流麗なる筆致で描かれた名著としての定評があります。

当時は著るべき文献に乏しく権威ある参考書も入手困難で、先生のご労苦は想像を絶するものがあつたことは推測に難くないところですが、燃ゆるがごとき情熱と不屈の使命感がなかつたら「宮古史伝」の出版は望まなかつたのであります。

その目録には、

「余病氣を退けて刊行せし本書が、いささかなりとも宮古島民に明を致し、新学界に貢献し、宮古研究に資するならば幸いこれに過ぎざるべからず、なお余生承らえて後日改訂修補を為し得ば、本望すに達せられたり云々」と述べておられます。

精神的苦悶、経済的不如意のなか、しかも病氣に纏らながら昭和二年二月「宮古史伝」は江湖にまゐられたのであります。

その二年後すなわち昭和四年一月十九日慶世村先生は三十七歳という若さで他界されたのであります。

万人ひとしくその遺志を惜しまねばなく、天ももしなす幾何かの生命を犠牲し給わば、さらに幾多の業績を成就したのであることは疑問の余地なきものと確信します。「沖浦の歴史」著者、比嘉春潮先生は、「宮古史伝」二十年來私の胸に懐かれて、研究上すべからざる恩恵を蒙り、たびたび学友に示して愛感を誇つた書の一つである。「上」述べられて、改めて言及するまでもなく「宮古史伝」は郷土史の歴史を学ぶうえで欠かすべからぬ文獻として、史学、民族学、言語学等の研究の役割を果し、文化の向上発展に大きく貢献しております。

慶世村先生は宮古研究の扉を開き歴史開拓のための礎を築いた偉大な先覚者として、その業績は永遠に讃えられるべきものと信じて疑いません。

希しくも今年には先生の五十年忌に当たります。この機会に貴重な文化遺産を継承し郷土文化の育成発展をはかるためにも顕彰は大きな意義をもつものであり、私達郡民としての責務ではないかと思料されます。

なほごとの趣旨をおくみとりのうえ、ご協力ご支援を賜りますようお願い致します。

一九七九年六月十五日

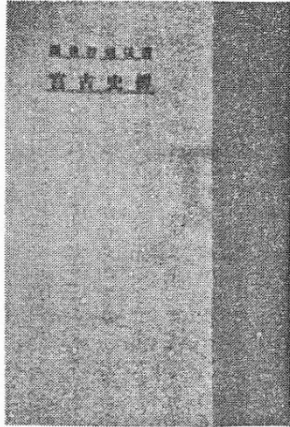
事業内容

- 一、顕彰碑の建立
- 二、慶世村恒任全集の発行
- 三、慶世村文庫の設置

慶世村恒任を顕彰する会

会長	砂川 恵敷
副会長	平良 玄勝
事務局長	吉村 文得
賛助委員	垣花 泰次 川満 昭吉 川根 トモ 砂川 金市 友利 金勇 山内 朝保 下地 恒正 下地 和宏
実行委員	盛島 明秀 前泊 朝憲 金城 良平 砂川 正雄 友利 正一 伊志嶺 義典 砂川 玄正 安慶田 政一 砂川 幸夫 仲宗根 将二
事務局	〒906 沖繩県平良市宇東仲宗根四二番地 (沖繩県立図書館宮古分館内) 電話(二六〇)(二)二三一七番

『宮古史伝』1976年復刻版 (吉村玄得)



表紙



巻表紙

と慶世村恒任」を発表する。
 10・18 下地利幸は宮古郷土史研究会十月定例会で「慶世村恒任の人物像」について発表する。

一九九一 (平成三) 年

1・23 台湾で須藤利一らによってガリ版刷りで発行された「宮古史伝」は県立図書館を通して宮古分館に委管される。
 8・29 宮古郷土史研究会は慶世村恒任生誕一〇〇年を記念して、県立図書館宮古分館で「慶世村恒任を語る集い」を催す (報告者「下地利幸」「慶世村恒任の人物像」、平良新亮「宮古史伝」と慶世村恒任、仲宗根将二「世評」にみる慶世村恒任像、司会・下地康夫)。

一九九二 (平成四) 年

10・15 仲宗根将二は慶世村恒任も慶世村家世帯主として加盟する「東大原隣所契約書」をひるぎ社刊『地域と文化』73号に紹介する (一九九三年三月宮古郷土史研究会定例会で発表)。

10・31 宮古郷土史研究会は『宮古研究』6号で「慶世村恒任生誕百年」を特集する (下地利幸・平良新亮・仲宗根将二)。
 一九九五 (平成七) 年

2・8・3・27 仲宗根将二は『沖縄タイムス』の「人物列伝 沖縄言論の百年」シリーズに「慶世村恒任」を連載する (32回)。

7・20 仲宗根将二は恒任執筆と想定される『先島新聞宮古附録号』(一九一九「大正八・五・二〇」) コラム「千里眼」について、「悲運に泣く糟糠の妻」宮古女性史の一環として」と題して宮古郷土史研究会七月定例会で紹介する。

一九九九 (平成十一) 年

12・ 平恒次米国・イリノイ大学教授は母喜美子 (恒任夫人) の三回忌を記念して宮古郷土史研究会に十万円寄贈する。

二〇〇八 (平成二十) 年

11・28 仲宗根将二は『新版 宮古史伝』(東京・富山房インターナショナル) に「解説 慶世村恒任と『宮古史伝』」を執筆する。

- 二〇〇九 (平成二十一年)
 - 1・9 仲宗根将二は『宮古郷土史研究会会報』170号に「新版 宮古史伝」として三十余年振り四度めの復刻版を紹介する。
 - 1・25 仲宗根将二は『新版 宮古史伝』を『琉球新報』に紹介する。
 - 4・4 平良勝保は『新版 宮古史伝』を『沖縄タイムス』に紹介する。
- 二〇二二 (平成二十四) 年
 - 3・30 宮川耕次は『宮古島市史』第一巻通史編「みやこの歴史」に「慶世村恒任と『宮古史伝』」を執筆する。
 - 二〇一六 (平成二十八) 年
 - 2・20 宮古人材史研究会・宮古の自然と文化を考える会は「宮古の先達・五人の学識者たちの業績・知的遺産とその継承」をテーマに平良下里・働く女性の家でシンポジウムを催す。金井喜久子 (三島わかな・新城悦子)、慶世村恒任・稲村賢敷 (仲宗根将二)、砂川正亮 (荻原正恵・砂川正勝・垣花豊順)、工藤恵栄 (上原富美哉・木村茂行・沢岬英正)。
- 二〇二二 (平成三十四) 年
 - 3・24 宮古人材史研究会「宮古先人の足跡」を刊行する (金井喜久子・慶世村恒任・稲村賢敷・砂川正亮・工藤恵栄)。



〈資料5〉慶世村恒任之碑 (一九八〇年)

